

生活環境が子どもの健康や心身の発達におよぼす影響に関する研究

総括研究報告

松田 一郎

要約：（１）高層住居は妊娠・分娩・育児に様々に影響しているが、対応の仕方改善できる可能性がある。両親特に母親による児の受動喫煙は問題である。小学生の登校時間と児の健康には関連性がある。（２）テレビは児にプラスにもマイナスにも作用するので、できるだけプラスになる面を伸ばすように指導する必要がある。（３）小児の骨折は近年注目をあびているので、それだけに慎重な調査がいる。基礎データとして小児の骨塩量の正常値を作成した。骨折の既往のある児の骨塩量は少なかった。（４）小児の事故防止対策を具体的に進め良好な結果を得た。

見出し語：生活環境，学習環境，テレビ，骨折，事故

I. はじめに

生活環境が年々変わっているが、その中で子どもの健康はどのように影響を受けているのだろうか。この調査研究を通じてその実態が少しでも解明され、それに対して、もし必要ならば対策をたて改善することができないだろうか。それがわれわれが今回行ってきた調査研究の基本的なクエッションである。そして、単に負の影響のみでなく正の影響にも目を向けたいと考えた。また、研究内容をできるだけ客観性にまとめるために数量で示し、批判に耐えるものにしたとも考えた。

II. 研究グループの構成

研究は次の4つの分担研究に分けて行われた。

1. 居住環境と子どもの健康 (松田一郎)
2. 学習, 遊び(学習方法, テレビゲーム, テレビ)と子どもの健康 (谷村雅子)
3. 小児の骨発育と骨障害 (清野佳紀)
4. 小児の事故とその予防 (田中哲郎)

である。各分担研究のリサーチクエッションは、それぞれの報告に記載した。

Ⅲ. 研究方法

まず各分担研究者は、年度初頭の研究会で研究内容を検討した。それぞれに必要なアンケート用紙の作成や具体的研究方法（例えば測定器具を用いた様々な測定方法）を討議し、その上で一年間の研究活動を行った。

Ⅳ. 結果と考按

(1) 高層階住居に居住している妊婦では、流・死産が多いことが判明している。そこで喫煙・飲酒習慣が高層住居の主婦では高率なのではないか、という仮説を立てて調査研究したが、実際には差が認められなかった。また高層階の母子関係は密着が高く児の自立性に問題があると考えられたが、種々のメディアを使って啓蒙活動をすることにより、改善され得ることがわかった。居住についての満足度を調べた結果、高層階に居住する者が満足度が高く、このことは生活全般について、むしろ正の方向に働いていることがわかった。

両親による受動喫煙の影響は母親のそれによる方が父親の場合よりも、より直接的であり、呼吸器疾患罹患率、問題行動の発生率に有意に作用していることが判った。

但し、問題行動に関しては受動喫煙そのものだけでなく、母親の性格も関係していることが判明した。

小学生生徒の通学時間と健康の関連性をみたところ、60分以上かかる場合は、不定愁訴が多くなるのに反し、60分以内では、逆に通学時間が長い程、不定愁訴が減る傾向にあった。子どもは現在の生活環境にわれわれの想像以上に適応しているようにもみえる。

(2) テレビ、テレビゲームは度を越すと問題になるのでそのための時間配分をどうするかが問題になった。また、内容には好ましいものと好ましくないものが混在しており、特に後者についてはある程度の規制も必要のように思われた。好ましいものでも、単に見せるだけでなく、それに関連した大人からのアプローチが必要と考えられた。テレビゲームは児の眼の近視の原因になるかという疑問は否定された。弱視の治療には役立った。子どもの運動量の適正化を求めて行った検査では、学校生活の中での運動量が重要な部位を占めていることが明らかになった。子どもの生活全般を生態学・医療人類学としての視点からまとめようということで新しい研究が始められた。

(3) 子どもの骨密度の正常値を、昨年よりも症例数を増やし、また年齢も拡げて、まとめた。さらに骨代謝のパラメータとなる。デオキシピリジン、ピリジノリンなどについても測定した。重要なことはこれまでも早い年齢で、女性は16～18歳で、男性はそれにやや遅れて骨塩量がピークになること、また、この骨塩量の成熟には適正な運動が不可欠であることが判明した。この時期のダイエットなどはかなりの悪影響を与えるので正しい指導がぜひ必要であるとの見解で一致した。

(4) 子どもの事故を予防する目的で静岡県などの特定地域を選定し、モニタリングシステムを設定した。さらに事故防止の教育方法として乳児検診時を利用して、対策法を説明し啓蒙活動を行った。96.4%の人が配布されたパンフレットを読み、96.9%の人が予防対策を積極的に参加する態度を

示した。その結果有意に子どもの事故発生件数の低下がみられた。

V. 今後の問題

これまでの調査研究、一部の介入研究はわれわれに貴重なデータを残してくれた。

子ども達は現在の生活環境によく対応しているように見える。しかし、改善すべき、また改善できる問題もいくつか指摘されている。今後の研究を通じて行政レベルでの対応に役立てる結果を出し、子どもの健康を含めた生活全体についての提言を行いたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:(1)高層住居は妊娠・分娩・育児に様々に影響しているが、対応の仕方で改善できる可能性がある。両親特に母親による児の受動喫煙は問題である。小学生の登校時間と児の健康には関連性がある。(2)テレビは児にプラスにもマイナスにも作用するので、できるだけプラスになる面を伸ばすように指導する必要がある。(3)小児の骨折は近年注目をあびているので、それだけに慎重な調査がいる。基礎データとして小児の骨塩量の正常値を作成した。骨折の既往のある児の骨塩量は少なかった。(4)小児の事故防止対策を具体的に進め良好な結果を得た。